



真脇遺跡 - 晩期の環状木柱列と調査の取り組み -

高田 秀樹（能都町教育委員会）

1．真脇遺跡の位置と環境

石川県鳳至郡能都町字真脇に所在し、日本列島のほぼ中央にあつて大きく日本海に突き出ている能登半島の富山湾に面した東側の海岸近くに位置している。南側が海に面し、西・北・東の三方を標高100m前後の丘陵に囲まれ、標高4～12mの沖積低地に遺跡が位置している。海底の地形は、半島基部側の平坦な海底とは異なり、真脇付近で急激に深くなる。こういった条件がイルカの接岸を促す要因とされ、真脇周辺では昭和初期まで、イルカ追込み漁が盛んに行われていた。

2．真脇遺跡の概要

真脇遺跡は、昭和57・58年（第1・2次調査）の発掘調査により、縄文時代前期初頭（約6,000年前）から晩期終末（約2,300年前）までの約4,000年間もの間、縄文人が定住していた集落遺跡と判明した。検出した遺構として晩期の環状木柱列、中期の貼り床住居址、前期末のイルカ層がある。また、出土した遺物には後期の土製仮面、中期の鳥さん土器（新保式土器）、前期のお魚土器（真脇式土器）などがある。このように出土した遺物や検出した遺構には貴重な発見が多く、平成元年1月9日に37,599.94㎡が国指定史跡となり、平成3年6月21日には大量の出土品のうち219点が国指定重要文化財となる。

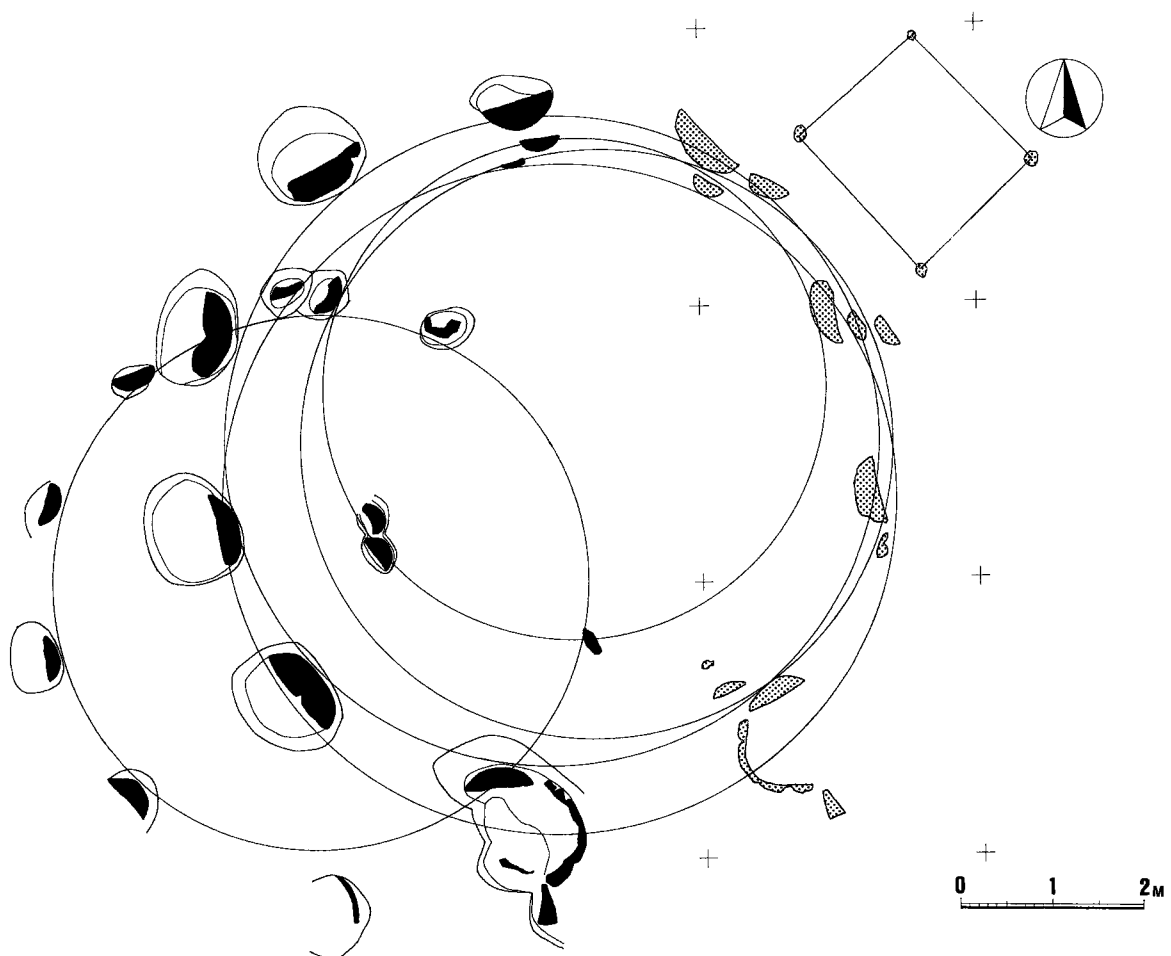
平成10年から史跡整備のための発掘調査を再開し、縄文時代の環境復元の調査を進めている。平成13年の調査において、4基の土壌墓が検出された。その内の3基は板敷き土壌墓と呼ばれ、国内で初めて確認された埋葬方法として注目を集めている。また、この墓の近くから、祭祀に使われたと考えられている、把手付土製ランプなども出土していることから、中期の集落の中心部と判明した。平成14年からは、晩期の環状木柱列の調査を行っている。同じ場所に数回の建て替えを行っていることが判明した。また、発掘調査と並行して自然科学的分析も実施し、集落と海の関係も明らかになりつつある。

3．晩期の環状木柱列について

昭和57・58年（第1・2次調査）において検出された環状木柱列の内、柱根の直径が約90cm前後の環状木柱列（以後「A環」とする。）の残りの柱根4本と門扉状遺構の調査を平成14・15年（第7・8次調査）にかけて実施した。

検出した木柱1・2・3は残存する大きさと出土した位置から、第2次調査で出土したA環の一部と考えられる。柱根の間隔は約2.2mで直径約7.5mの真円プラン上に10本の柱が立つことになり、当初から予想された規模であることが判明した。

木柱1は検出した木柱根では最大で、直径約96cm、厚さ約33cmである。木柱2は直径約73cm、厚さ約26cmである。木柱3は直径約76cm、厚さ約27cmである。この2例には、弧面に曳き網をかけたとみられる溝が掘られており、掘り方内には人頭大から拳大の石が入れられている。さらに礎板も使われている。門扉状遺構は半割柱、門扉、三角柱と呼ぶ木柱根を検出した。半割柱には弧面に溝が掘られている。門扉は丸太を薄く割ったものを使っている。三角柱には礎板が使われていることが判明した。



第1図 環状木柱列平面プラン（第2・8次調査より）



写真1 環状柱列検出状況（西方向より撮影）



写真2 木柱1検出状況



写真3 木柱3検出状況



写真4 木柱2、6、7検出状況



写真5 木柱2検出状況



写真6 門扉状遺構検出状況
(南方向より)

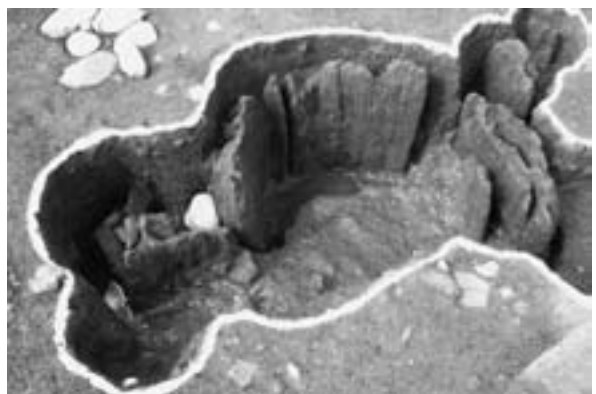


写真7 門扉状遺構検出状況
(東方向より)